

自己評価報告書

平成 23 年 3 月 31 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20592562

研究課題名(和文) 自己免疫疾患患者の QOL 向上をめざした看護支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Nursing program development for autoimmune disease Improve QOL

研究代表者

青木きよ子(Kiyoko Aoki)

順天堂大学・医療看護学部・教授

研究者番号：50212631

研究分野：医歯薬

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：自己免疫疾患 QOL 看護支援 プログラム開発

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、自己免疫疾患患者のエンパワーメントが高められ、QOL が維持される看護支援モデルについて検討することである。

2. 研究の進捗状況

今までの研究成果として、自己免疫疾患患者のエンパワーメントが高められ、QOL が維持される看護支援モデルの作成に必要なとされる以下の成果を得た。

(1)SLE 患者の質問調査から「療養上の困難」分析し、療養上の困難は、病気の進行に対する不安や、将来への不安など、病気の不確かさによるものの認知が高いことを明らかにした。また、患者の療養上の困難認知は特に QOL と強い相関があり、療養上の困難認知の低減をはかることが QOL の維持・向上に必要なことが示唆された。

(2)外来通院中の全身性エリテマトーデス患者のセルフケア行動の特徴としては、治療薬の効果が高いため、患者も内服薬の重要性を理解し、実行していた。また、人間関係や仕事でのストレスが病気に影響を及ぼすことを理解してはいるものの、適切な対処法がとられているとはいえない状況があった。セルフケア支援においては、病状の把握とともに家庭、社会的支援環境を把握し、病の軌跡に応じた情報提供、環境

調整を行う必要性があった。

(3) (1)(2)をもとに、17 才、SLE 患者の看護介入を行った。まず、病気の進行に対する不安や、将来への不安など、病気の不確かさによるものの低減をはかり、本人が希望している ADL 拡大への支援と、家族に対して社会資源の活用のための情報提供をした。その結果、介入前との比較において QOL 尺度得点の著明な改善を見ることができた。

④その後、自己免疫疾患の代表疾患である関節リウマチ(以後 RA とする)患者における療養上の困難とその関連要因を明らかにする調査研究を実施した。RA 患者の「療養上の困難」は、「病気が進行することの不安」「将来の不安」「関節痛」「倦怠感」「医療費の負担」と、心理的・身体・経済的状況に対する認知が高くいていた。「療養上の困難」と「難病用主観的 QOL 尺度」には、強い関連があることから、RA 患者のアセスメントには、「MHAQ」に代表される身体障害の程度を把握するだけでなく、心理的・身体・経済的状況を合わせて、療養生活全般をアセスメントすることが必要であり、「療養上の困難」の低減に向けた継続的な支援が課題であるといえた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

自己免疫疾患患者のエンパワーメントが高められ、QOL が維持される看護介入に必要とされる療養上の困難、セルフケア行動の特徴を SLE 患者および、RA 患者の調査研究から明らかできた。また、SLE 患者では、これらの特徴を考慮した看護介入により患者の QOL の向上が図られている。

4. 今後の研究の推進方策

これまでの、研究成果から、自己免疫疾患に共通する療養上の困難を検討し、QOL の向上を目指した看護支援モデルの提示することを最終目的とする。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- 青木きよ子, 高谷真由美, 田邊雅美, 高崎芳成: 外来通院中の全身性エリテマトーデス患者の認知する療養上の困難と関連要因

[学会発表] (計 3 件)

- 青木きよ子, 高谷真由美, 桑江久美子, 高崎良成: 我が国における SLE 患者のセルフケア行動と療養上の困難の経年的変化.
- 高谷真由美, 青木きよ子, 桑江久美子, 高崎良成: 我が国における SLE 患者の自己効力感と療養上の困難との関連
- 桑江久美子, 青木きよ子, 高谷真由美: SLE 患者のセルフケア行動と関連要因